

山村の集い

—ウィトゲンシュタイン・シンポジウム—

井原 奉明

序 崖と森と戦場と

ウィトゲンシュタインは崖で考えた。

1913年の秋、ウィトゲンシュタインはノルウェーの小さな町ショルデンに渡り、湖畔の崖に小屋を建てて住み、世捨て人のような隠遁生活を送りながらほぼ一年間論理学の研究に没頭する。時に24歳。フレーゲに勧められてラッセルのもとを訪れたのが1911年秋であるから、本格的に論理学の研究を始めてから二年も経っていない。

現在、命題論理という名で呼ばれる論理学はフレーゲをその嚆矢とする。フレーゲ、ラッセルと流れるその学問的筋道筋は、この頃はまだ完成と呼ぶに遠く、現在進行形の学問であった。その命題論理をラッセルの下で学び始めてから、ショルデンに渡るまでがわずか2年弱。ウィトゲンシュタインの天才とはいかばかりか。

『論理哲学論考』として後に結実する思想の芽を育んだのがこの時期における崖っぷちでの知的格闘であったことは間違いない。また、付け加えて言えば、この後にも三回ほど彼はここを訪れており、中でも、1936年の夏から一年間ほど滞在したときには『哲学探究』を書き始めているのである。しかも、いずれの機会もたった一人で。ショルデンの崖で思索しなければ、20世紀以降、哲学の歴史は変わっていたかもしれない。

天才は時に凡人の思いつかない奇想を思いつく。「ケンブリッジよりも人のいない所の方が、仕事を中断されたり邪魔されたり、気が散ったりしないので、はるかに多くの良い仕事ができるだろうし、他人を軽蔑しそうになったり、神経質な自らの性質が他人を怒らせてしまうこともないだろう」と考えたウィトゲンシュタインは、当初北極圏にあるロフォーテン諸島行きを決めた。冬になれば一日中太陽が出ないこともある、そんな場所である。しかし、そのような場所では冬期に宿も閉鎖されてしまうので（当然だろうが）、行き先をショルデンに変えたのである。

ショルデンは、ベルゲンの北にあるノルウェー最大のフィヨルド、ソグネフィヨルデンにつながって一番奥にあるルストゥラフィヨルデン（大きなフィヨルドの中の小さなフィヨルド）の、さらに一番奥にある。先に小さな町だと言っていたが、本当に小さな田舎町である。それだけでも十分に思えるが、ウィトゲンシュタインは町中でなく、そこからエッツワネットという湖を渡ったところにある山の斜面、木々に囲まれ、大地苔生す崖に住んだのである。峻厳、苛烈。天才の精神は計り知れない。

ウィトゲンシュタインが住んだ小屋（今はないのでその跡）の周りには、何度写真を見ても息を呑む。人工的な気配をまったく感じないだけでなく、そもそも他人が近づくことを拒絶しているとしか思えないのである。小屋跡には今や土台石が残るのみなのだが、地元の人はその辺りを「エステリケ」と呼んでいるそうだ。この語はノルウェー語で「オーストリア」のことである。つまり、その場所は「（ウィトゲンシュタインという）オーストリア人の住んでいた処」ということなのだ。住所という概念の及ばない、元々名前のない土地。そして、そこに住む男。ウムムと唸るしかない。

1914年の三月から四月にかけて、ケンブリッジの俊英ムーアが、ベルゲンから汽車、そり、汽船、モーターボートと乗り継いでショルデンにウィトゲンシュタインを訪問した。この機会に、ウィトゲンシュタインは、論理に関して達成した研究成果をムーアに口述筆記させている（今日「ノルウェーでG.E.ムーアに口述筆記させたノート」として知られる）。人里離れた場所に孤独をかこち、世人との付き合いを断って研究に沈潜し、訪ねてきた先輩（教師？）ムーアにノートを口述筆記させるなどとは、到底普通の人のすることではない。その意味でもウィトゲンシュタインは、紛れもなく型破りの天才であった。

また、このとき、ウィトゲンシュタインは、フィヨルド

に面した山の斜面、崖にムーアを案内し、小屋を建てる計画を打ち明けている（まだ小屋は建てられていなかった。ただし、この場所は地主に断られたため計画を変更せざるを得ず、現在、小屋跡が残っているのは別の場所である）。ケンブリッジからはるばる旅をしてきた常識人ムーアが崖に連れて来られて途方に暮れただろう姿を想像するとおかしい。文字通り、「真理の大海は浩として、涯際なし。」

絶壁や崖で思索をするという行為は、祈りに近いのかもしれない。仏教であってもキリスト教であっても、また他の宗教でも、強烈な信仰心を持って崖や洞窟に寺院や教会を建てることは珍しくないだろう。メテオラに代表されるように、崖や山の頂上に登り、少しでも神に近づきたいという願いを抱いて修道院を建て、隔絶された閑居で祈りを捧げようとする宗教的熱情は、古今枚挙に暇ない。そう、ウィトゲンシュタインは宗教的な人間なのだ。

酔客の戯れ言の極みではあるのだが、哲学者を〈垂直志向の哲学者〉と〈水平志向の哲学者〉に分けて遊んだことがある。二項対立の図式を作り、理由をこじつけて誰でも彼でもそこに抛り込むという荒っぽいゲームだ。区別としては、たとえば、社会を意識し、他者との交遊を楽しみ、拡げていこうとする人は〈水平志向〉、一方で他者との交わりが希薄であり、自分のことに没頭し続ける人は〈垂直志向〉。現実に関心を持ち、現実的に考察する人は〈水平志向〉、形而上学的な観念の世界に遊ぶ傾向のある人は〈垂直志向〉。幅広いテーマに亘って関心を寄せる人なら〈水平志向〉、テーマを狭く絞って深く掘り下げる人なら〈垂直志向〉。世俗的な欲求を持ち、人間臭さを漂わせる人は〈水平志向〉。富や名誉などどこ吹く風、世俗の垢にまみれず宗教的な静謐性を感じさせる人は〈垂直志向〉。

私の勝手な定義によれば、ソクラテスやアリストテレス、デカルト、マルクス、ラッセルなどは〈水平志向〉、プラトンやスピノザ、カント、フッサールなどは〈垂直志向〉の哲学者である。まあ、彼らが上述した二分法すべてに対して明瞭に分類されるわけではないし、だからこそ、ああでもないこうでもない、それは違うなどと酔論として成立するのだが、そのようなゲームであっても、『論理哲学論考』の作者が〈垂直志向の哲学者〉であるというのは衆目一致するところではないだろうか。

〈垂直志向の哲学者〉は文字通り垂直な場所で考え、『論

理哲学論考』という垂直的な哲学書——論述の文章が階層性を持った番号を付して並べられた書——を作り上げた。

ウィトゲンシュタインは戦場でも考えた。

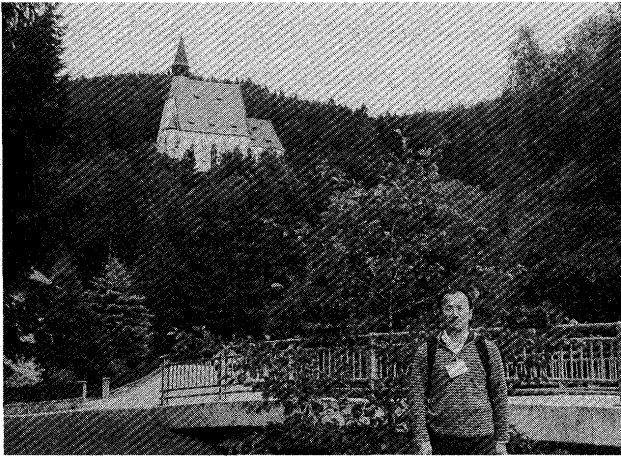
彼は第一次世界大戦時に従軍志願している（兵役義務の免除も受け入れず、士官として養成される特権をも拒否してのことである）。オーストリア・ハンガリー軍の要塞砲兵連隊の一員として東部戦線に配属され、最前線にも出た。激戦の続く陣地戦の只中で、彼は考え続けている。時に日付が空くことこそあれ、『草稿 1914-1916』として彼の死後発表された原稿には、ずっと思索を続けた彼の書き付けが残されている。オーストリア・ハンガリー軍が休戦受諾した後、捕虜収容所へ収容されても、そんな中でさえ彼は考え続けた。

ウィトゲンシュタインは森でも考えた。

捕虜収容所から釈放されてウィーンへ戻ったウィトゲンシュタインは、小学校の教師になるべく教員養成学校へ入り、卒業後、トラッテンバッハという小さな村の臨時教員となった。ここで二年。プーフベルクで二年。そしてオッタータールで二年。これが小学校教師としての彼のキャリアである。トラッテンバッハとオッタータールは隣り村であり、ウィーンから南へ約 100 km、低オーストリアのキルヒベルク・アン・ウェクセルにある。低オーストリアとはいえ、アルプスの北端といわれる（地元の人たちはそう信じている）地域であり、山の中の村だ。そもそも、「ベルク」はドイツ語で「山または丘」の意。この地域は緑深き森林に恵まれており、とても美しい。

ウィトゲンシュタインはこのような森の中でも思索した。それは決して哲学的な思考ではなかったかもしれない。というのも、『論考』として完成する思想が真理であることが侵しがたく決定的であり、哲学の問題はその本質において最終的に解決された、と彼は（その頃）信じていたからである。

ウィトゲンシュタインはオッタータール時代に『小学校のための辞書』を出版している。子供達が使えて、その地方の方言まで載っている辞書の必要性を痛感した彼は、自ら辞書の編纂をした（『辞書』の原型は書き込み式の手作り単語帳であり、3000 以上の語を収録していたという）が、この『辞書』はアルファベット順でない。アルファベット順に並べても、派生語を幹語に付加する方法で並べても、辞書



キルヒベルクで

キルヒベルクは「教会の丘」の意。 山と森と教会と。

においては不都合が生じると考えた彼は、どちらの欠点も消す方法を編み出したのである（特別なレイアウトを採用した）。緊密な関係にある同種の語（幹語と派生語）の間に異種の語が挟まれるという、アルファベット順による欠点。派生語を幹語に付加することによって、アルファベット順でなくなり、検索に時間がかかってしまうという欠点。これらの欠点は子供達に高度の抽象化能力を要求するものだから、子供が使う辞書である以上、いずれの方法もそれだけでは勧められないというのがウィットゲンシュタインの考えであった（彼はこの考えを文部省向けに書いた『辞書』の説明文に使っている）。この辺りがウィットゲンシュタインの面目躍如といったところか。彼は森の中でもいろいろなことを考えていた。

そういえば、ショルデンの小屋も碧葉の森の中にあった。小屋のある湖畔は、崖といっても岩肌剥き出しの断崖絶壁ではない。木々が深く生い茂る緑林の山である。人並み外れて鋭敏な神経を宿したウィットゲンシュタインにとって、小屋を取り巻く深緑の森は一服の安定剤であったのかもしれない（ショルデン滞在中は、相当に厳しい精神的動揺を何度も感じている）。

山村の集い——キルヒベルク・アン・ウェクセル

閑話休題。本題に入ろう。ここからは肩の凝らない読み物にしたい。

ウィットゲンシュタイン関連の学会は数多あれど、毎年のようにシンポジウムを開くものはそれ程多くない。「オー

ストリア・ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン協会（Austrian Ludwig Wittgenstein Society）」（以下ALWSと略）は、そんな中で毎年シンポジウムを開く熱心な学会だ。名前にオーストリアと付いているが、オーストリアのウィットゲンシュタイン研究者に止まらず、ヨーロッパやアメリカ、アジアからも研究者を多く集めており、毎年八月に学会を開催する。場所は決まっていて、キルヒベルク・アン・ウェクセルにあるキルヒベルク。

ALWSのホームページを見ると、毎年研究発表をする人が100～250名、参加者は200～500名だと書いてある。これは若干誇張気味かなとも思うが、まあ、ウィットゲンシュタインに関わる研究だけでこれだけ集めているのだから、活発な学会だと言えるだろう。

キルヒベルクを訪れるには、車か鉄道を利用する。車ならウィーンからトリエステへ続く「南高速道路」を使うが、学会参加者はふつう鉄道を利用する。キルヒベルクには列車が通っていないので、グログニッツという駅まで行き、そこからはバスかタクシーに乗る。ウィーン南駅からウィーナー・ノイシュタット（名前とは異なり、古い街）を通過してグログニッツまで列車でおおよそ1時間（1時間といっても、日本とは違って、乗る列車によって所要時間がかなり異なる）。

2005年夏、私はALWSの学会に参加した。ウィーン南駅から乗る列車は二階建てで最新式の車両であった。胴体にはイタチが描かれていて可愛らしい。私は欧州鉄道の旅が好きなのでヨーロッパ内の移動には鉄道を利用することが多いのだが、オーストリアのこの車両は乗り心地も快適で素晴らしかった。



キルヒベルクの小川

小川といえば、哲学の小径にふさわしい。



ウィーン南駅

列車の前で。イタチを指差して愉しむ余裕がある。

乗り込んでからは早速二階へ上る。景色を見るにしても気分的にも、どっちにしたら二階の方が良いと思う。けれども、同じ車両で二階にいたのは数名のみ。貸切みたいで、より一層快適な旅となった。

グログニッツまで1時間弱。ここまでの道程に山はなく、平らな大地を進んでいく。悠久の歴史の中で、幾多の民族、人々がこの大地を踏みしめ、移動し、住み、語らっていたことか、こんな空想を巡らしていると、あっという間にグログニッツに到着した。

オーストリアへの出発前にホームページ等で調べた時には、グログニッツは比較的大きい街だと思った。地図上でもグログニッツは活字が大きいし、キルヒベルクまでのルート案内するページでもグログニッツは大きく扱われている。ウィーンの友人から「キルヒベルクは行ったことないが、グログニッツなら行ったことがある」と聞いたし、きっとその地方の中心機能を果たしている町なのだろうと思った。ウィーンを出る時、友人達に、「キルヒベルクの方は寒いかもしれないよ」と教えてもらった時に「平気、平気」と答えたのは、寒くても涼しくても耐えられるという意味でなく、寒ければグログニッツで買い物ができるだろうと勝手に思っていたことだったのである。

着いてみて驚いた。駅はまるで無人駅（駅員がいない時がある。日祝は人がいない）。店といったら、駅の売店のみ。しかも閉まっている。ロータリーには待ちタクシーなど一台もない。これでは日本のローカル線の駅である。駅舎は新しく綺麗だったが、あまりに予想外、寂然不動の様子。一抹の不安に心が曇った（後で知ったのだが、街として開けているのは駅前でなく、駅から少し離れた所だった）。

というのも、学会から送られたメールには「グログニツ

ツに着いたら、バスかタクシーで移動して下さい」と書かれていたからだ。タクシーは一台も待っていないので、どうやら呼び出さないといけないようだ。それならバスで、と思って時刻表を見ると、ヤヤヤ、その日は路線バスが一本も走っていない。日曜は走らないとか、学校が夏休みの時は走らない、とか書いてある。そもそも児童生徒達が通うためのバスなのだろう。そうか、それならどれくらい所要時間がかかるか調べておこうと思って、時刻表を確認した。ムムム、路線によって、まったく所要時間が異なる。1時間で着くものもあれば、2時間かかるものも、それ以上かかるものもある。エエ、そんなにかかるの!? タクシーを利用するとしたら一体いくらするのだろう……タクシーを呼ぶだけでなく、値段交渉もしなければいけないか……。公衆電話だと聞き取りにくいな、小銭が足りなくなったら両替してくれる所もないな……。重い気分だ。一社しかないタクシー会社に電話をかけてみた。いくら呼び出しても通じないので、いったん切る。またかける。通じない。いや、今度は通じたのだが、英語が通じない。電話の向こうで「英語だ、英語だ、〇〇さんと呼んで」などと慌てふためいている。こちら慌てふためいた。キルヒベルクまでどれくらい時間やお金がかかるのか、不明なのだ。ドイツ語で値引き交渉を上手くやってのける自信はない。コミュニケーションギャップにお互い悩みながら、こちらの小銭が続く限り会話をした（会話と呼べるほどの中身はなかったが）。結局、所要時間も運賃もわからないまま、とにかくタクシーが一台来てくれることになった。（続く）



グログニッツ駅

不安げな顔がこの後を予感させる……

（いはら ともあき 英語コミュニケーション学科）